

## 日本企業の失敗に学べ

この夏米国のビジネススクールで「日本の企業経営」を担当している。昨年の十二名の受講生が、今年は二十五名に倍増した。日本企業経営の失敗に対する関心の高まりが背景にある。

米国企業経営は八〇年代末期と同様の問題に直面している。経営者の短期的視野が企業価値をゆがめ、金融プロフェッショナルの貪欲が行き過ぎて問題を大きくしている。前回のボウスキーやミルケンに代わる悪役は、成り上がり企業経営者と会計士やアナリストの専門家だ。この十数年間米国企業の経営の本質は何も変わっていない。唯一異なるのは、前回は日本企業の長期的視野での経営の成功に、今回は同じ日本企業の失敗に学べと言われている点だ。

米国のビジネスマンは勉強好きだ。日本企業経営失敗の原因を米国流の経営学の理論に依拠して一般化し、教訓を学ぼうとしている。翻って日本のビジネスマンや経営学者は、米国流の企業経営を進んでいると持ち上げたり、だめだときき下ろしたりするだけで、それがいかな

る環境のもと、どのような原理や原則に基づき営まれ、その長所や欠点はどこにあり、日本企業の経営にどのように適合したりあるいは適合しないかを厳密に分析しているわけではない。

## 企業は、小さく、平たく、迅速で、透明になる？

### 新しい組織と経営戦略

佐々木スミス三根子

東洋経済新報社  
2002年6月



## 理論と現実分析の結合

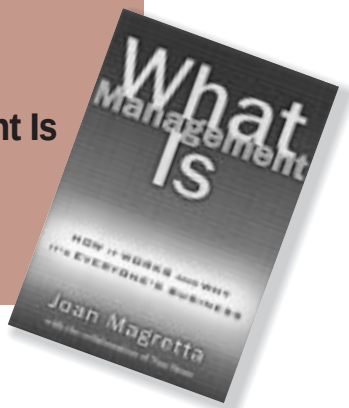
今回取り上げた二冊は、このような問題を日米の優れた女性経営研究家がまとめた中身の濃い本である。一冊目『企業は、小さく、平

たく、迅速で、透明になる？』は投資銀行エコノミストの佐々木スミス三根子氏が、ノーベル経済学者サイモンを始め著名な経済学者十人に、米国企業の戦略と組織の将来についてインタビューをした記録であ

## What Management Is

Joan Magretta

Free Press  
2002年



る。米国の一流の企業経済学者が抽象化された理論に依拠し、現実の企業の戦略や組織を実証的に研究する。学者と経営管理のプロとの間で、ビジネススクールでの教育などを通じこの理論的成果が共有さ

れ、それをベースに現実のビジネスが分析され、合理的な米国流の経営の考え方が一般化する。著者はインターネット経済下で既存の企業が組織をフラット化し、意思決定を迅速化する背景を学者達の理論と現実分析の中から明らかにしている。

一方『What Management is』のジョーン・マグレッタはハーバード・ビジネスレビューの長年の編集者としての経験を生かし、ドラッカー以降の発達した経営学の理論が具体的にどのように企業経営の成功に繋がるかを明らかにする。そこでは例えば、「ビジネスモデル」と「経営戦略」といった概念が、前者は単なるコンセプトでこれが企業経営の成功に繋がるには戦略が必要になるといった形で明確に定義されたうえで、その具体的な事例が説明される。著者は経営学の確立が二〇世紀最大のイノベーションであったとして、経営に成功する企業組織の基本原則を具体例を多用して読者の前に提示していく。

日本の経営書の中で一通りの理論をここまで実務家にも理解しやすく書いた物は残念ながら見当たらない。